

日本で樹木葬墓地は普及するか

小谷 みどり

<関心が高まる樹木葬墓地>

東京都では昨夏、都立小平霊園内に新たに整備した「樹木葬墓地」の利用者を募集したところ、500人分の募集に対して16.3倍もの申し込みがあり、大きな話題となった。「樹木葬墓地」とは、一般的には樹木葬墓地と呼ばれており、樹木の下に土に直接納骨するタイプのお墓を指す。墓石の代わりに樹木が立っているお墓だと考えればよい。海や山などに遺灰を撒く「散骨」と混合されやすいが、樹木葬は、墓地として認可された場所に遺骨を埋める点で、従来のお墓と同じである。

東京都の「樹木葬墓地」は、コブシやヤマボウシなどが植えられた敷地に穴を27か所開け、一つに約400体分の遺骨を納めるといふ、血縁を超えた人たちでの合葬となる。すでに亡くなった人の遺骨を夫婦、親子、兄弟姉妹が申し込む方法と、本人が生前に申し込む方法がある。使用料は1体約13万円（粉骨の場合は約4万円）で、従来のお墓に比べて廉価な点も特徴だ。

しかし、そもそも小平霊園の「樹木葬墓地」に限らず、6箇所ある都立霊園には毎年、申し込みが殺到する。従来のような縦長の墓石を建てる区画には昨年は10倍以上の応募があった。年によっては20倍を超えることもある。一方、小平霊園には、血縁を超えた人たちの遺骨を地下の埋蔵室に合葬する施設があるが、こちらは廉価であるにも関わらず、申し込み倍率は2、3倍程度にとどまっている。つまり、費用面や、継承を必要としない形態である点が、樹木葬人気につながっているとは断定できないのだ。

<高倍率の実態>

それでは、樹木葬墓地を志向するのはどのような人たちなのだろうか。樹木葬墓地は、1999年に岩手県内で誕生したのを皮切りに、現在では、寺院や霊園開発業者、NPO 団体など、さまざまな主体が運営している。血縁を超えた人との合葬式ばかりではなく、一人だけで、あるいは家族や友人と一緒に同じ木の下に埋蔵されるタイプのものもある。費用はまちまちだが、墓石を建てるよりは安いという点、継承を前提としない点も、運営主体のいかんにかかわらず、一致している。

公営墓地では、横浜市（写真1）が2008年に、東京都に先駆けて樹木葬墓地を設置しているが、昨秋の応募状況を詳しくみると、横浜市も東京都も同じ傾向にあることに気づく。申し込み形態別で倍率を比較すると、1体分も2体分も、すでに遺骨を抱える遺族の申し込みよりも、本人の生前申し込みの方が突出して高いのだ（図表1）。都立霊園で10倍を超える従来的一般墓地は生前には申し込めないで、一般墓地と樹木葬墓地について、遺族申し込み枠の倍率を比較すると、樹木葬墓地は7倍程度で、一般墓地に比べて必ずしも高いとはいえないことが分かる。つまり、自分や夫婦が入るお墓を考えれば、継承を前提とせず、かつ自然に還れるイメージが強い樹木葬墓地を志向する人は少なくないものの、遺族として考えた場合、従来型の家墓に故人を納骨したいと考える人の方がまだまだ多いのが現状なのではないだろうか。

写真1 横浜市が運営する樹木葬墓地



図表1 樹木葬墓地の応募倍率の内訳

		横浜市	東京都
最新抽選年		2012年11月	2012年8月
1体分	遺族申し込み	全員当選	7.75
	生前申し込み	6.2	31.97
2体分	遺族申し込み	2.67	7.4
	生前申し込み	35.05	31.1

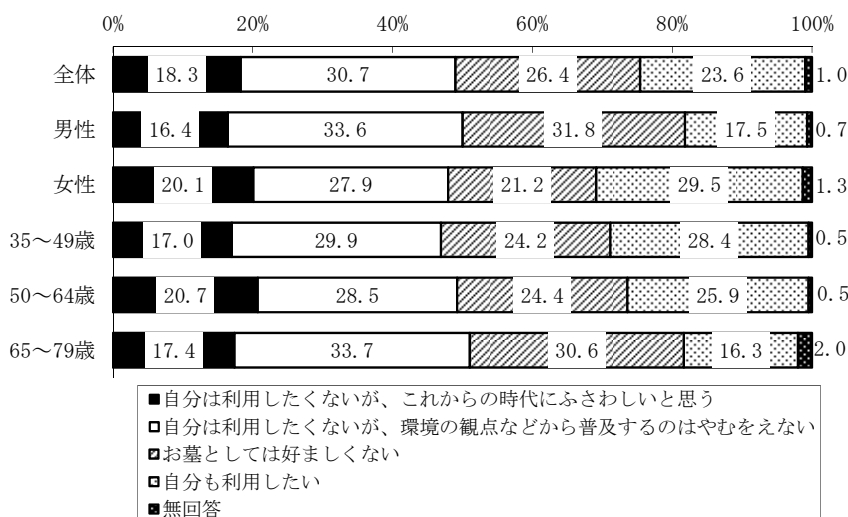
注：横浜市、東京都の公表資料をもとに、東京都の数字については筆者が計算した

また第一生命経済研究所の調査によれば、樹木葬墓地を「お墓としては好ましくない」と回答した人が26.4%いる一方で、「自分も利用したい」人は23.6%で、ほぼ同数だった(図表2)。

性別で見ると、男性では「お墓としては好ましくない」と考える人が31.8%いるが、「自分も利用したい」と考える人は女性で29.5%もいた。年齢層別では、「自分も利用したい」とする人は、64歳以下では4分の1を超えたが、65~79歳では「お墓としては好ましくない」と考える人が30.6%もいた。

この調査では、血縁を超えた人たちと一緒にいる合葬式のお墓についてもたずねているが、「自分は利用したくない」とする人は6割を超える半面、「お墓としては好ましくない」とした人は5.8%しかいなかった(『Life Design Report』(Summer 2010.7) p.12 参照)ので、樹木葬墓地が普及していけば忌避観は薄れ、自分が入るお墓として樹木葬墓地を生前に求める人は増えていくだろう。

図表2 樹木葬墓地についての考え(全体、性別、年齢層別)



注：調査は35歳から79歳までの全国の男女600名に対して、2009年9月に行われた

<環境保護の視点から樹木葬墓地を考える>

外国でも、樹木葬墓地は広がりつつあるが、その背景は日本とは少し異なる。例えば韓国や台湾では、

多死社会の到来で土葬用の土地が不足する懸念から、この10年間で土葬から火葬へと政策が大きくシフトしている。火葬の普及に伴って、新たに納骨堂や墓地が必要になるが、自然環境保護の観点から、両政府は樹木葬や散骨など、新たな葬法を積極的に推奨している。

欧米でもこの15年間で、自然環境に配慮した green funeral に対する関心が高まっている。イギリスでは、自然に優しい死を考える団体 natural death centre が1991年に設立されているが、この団体が推奨している遺体処理方法には、①エンバーミングをしない、②ダイオキシンを出す火葬ではなく、土葬を選択する、③ひつぎは、土で分解する素材や籐製などを使用する、④墓地に墓標を立てたり、木を伐採したりして整地をしない、といったルールがある。最初の墓地は1993年に開設されたが、以来20年間で、この考えに共鳴する地主たちが提供するなどした専用の墓地は、イギリス国内に260か所以上ある。写真2は、こうした墓地の一つ、

写真2 ロンドン郊外の自然墓地



つ、ロンドン郊外にある Woodcock Hill Woodland Cemetery の風景だ。木の根元に遺体が土葬されており、草のかけに故人を識別するための小さな番号札がつけられている。人工物は一切立てられていない。うえ、木々や草花は、もともとイギリスに生息する固有種のみという徹底ぶりだ。

とはいえ、火葬率が7割を超え、欧米では有数の火葬大国であるイギリスでは、火葬骨を納める樹木葬墓地の多くは人工的に整備されている(写真3)。同様に国土の問題から火葬率が高いニュージーランドでも、樹木葬墓地は近所の人たちの散策コースにもなっており、墓地が公園として、住民の生活空間に溶け込んでいる(写真4)。いずれも墓地とは思えない雰囲気、欧米の樹木葬墓地の特徴だ。

諸外国のように、環境保護の観点から墓地のあり方を考えたとき、樹木葬は有益な選択肢の一つであるように思える。一方、日本では、お墓は祭祀財産と規定され、実質上、子々孫々での継承を前提とするという、世界でも珍しい政策が採られてきたが、昨今、ライフスタイルや家族のかたちの多様化で、継承できない無縁墓の増加が社会問題となりつつある。その結果、新しい葬法としての樹木葬墓地は合葬式のお墓と同様、廉価な点や継承を前提としないという点がメリットとして強調されすぎている感がある。これからの墓地政策を考える上では、環境や生活空間からの視点も重要になってくるだろう。

写真3 ロンドン市内の樹木葬墓地



写真4 ニュージーランドの樹木葬墓地

